

～ラクダ母子への余計な手出し～

小 松 守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長）



フタコブラクダは大森山動物園で40年以上も前からいる古参の動物だ。ゾウやキリン、トラ、ライオンなどと並び存在感の大きい動物だ。派手さはないが、誰もが知る童謡「月の沙漠」にも登場するラクダは根強い人気のある動物だ。

本題前にいつものミニ動物学を少々、今回は変化できる力を根に秘め、過酷な環境で生き抜いたラクダの話だ。

ラクダは原始的な初期偶蹄類の仲間として登場、誕生は北米大陸だった。一部はユーラシア大陸に渡り、現在はフタコブラクダとヒトコブラクダの二種が生き残っている。後に反芻という高度な消化能力等を進化させた新しい偶蹄類の勢力が増す中、ラクダはその勢いに負けたが、特殊な水節約術を編み出し普通の動物が生きにくい沙漠等の乾燥地帯で生き延びることができた。

これとは別に、北米大陸からパナマ地峡を通り、南米大陸に移住した昔のラクダもいた。ラマやアルパカだ。やはり他の動物等の圧力が増す中、他が生きにくい高山地帯で生き抜いてきたのだ。原始的偶蹄類のラクダの先祖は厳しい環境変化に柔軟に適応できる原始的な能力を失っていなかったことで生き延びたとも言える。生き物は特殊化し過ぎると、袋小路に入り柔軟性を欠き、環境変化に適応しづらくなることが多い。自然史が教えている。

さて、今回は大森山のラクダの初出産をめぐる苦い思い出話である。

ラクダは中国甘粛省蘭州市と秋田市が友好都市関係を結んだ1982年、蘭州市からやって来

た。前年、当時の園長（故人）と獣医師の私が引受け準備で蘭州市に出向いた。市内五泉山公園の動物園に案内され、甘粛省ラクダ牧場から集められた何頭かのラクダのうち秋田に贈る2頭を選んで下さいと言われた。我々が立派なコブの雄雌に興味を示すと、現地のベテラン獣医師が私の耳元で「コブが小さい、若いのがいい。よく子を産む」と囁いてくれ、それに従った。

副市長の何英さんが2頭に名を与えてくれた。蘭州市の五泉山公園から湧き出た甘い友好の水が、黄河を下り日本国の秋田に届くことで、両市の関係が甜（てん）菜糖のように甘いものになると、雄に蘭泉（らんせん）、雌に田田（てんてん）の名を付けられた。中国らしい漢詩的な名に感動したのを思い出す。

秋田にやってきた蘭泉、田田の2頭は、現地獣医師のアドバイスの通り、後にたくさんの子を産み、育て、それらは日本各地の動物園に広まり、友好の願いは秋田を越え、全国に流れた。

そんな田田だが、初産の時は普通の出産とは違っていた。秋田に来た翌年には妊娠、日増しに大きくなるお腹を見ながら、ラクダ初繁殖の期待は大きかったが、一方で我々には繁殖経験もなく、かつ友好動物でもあり不安は大きかった。出産に向け様々な準備が進められた。

動物園での出産は獣医師、飼育員が立ち合い助産すると思われがちだが、そんなことはほとんどない。だが、田田の場合は違っていた。朝から落ち着かず、出産が近いことを知らせてくれた。急ぎ準備していると、なんと目の前で産

気づいたのだった。

初産のせいか、陣痛が激しく、普通は汗をかかないラクダだが、首筋や太ももにはしだいに汗が滲み出て、大きく息むと涙まで流す苦しみ様だった。立っては息み、座っては息むうちに、ついに産道から前脚と頭が出てきた。我々も固唾を呑みながら頑張れと念じたが、そこから先が大変だった。

肩部分が娩出できず苦しむ田田を見て、このままではまずいと助産した。前脚を持ち、陣痛に合わせて胎児の引き出しを試みるが出てこない。懸命に息むタイミングに合わせてようと身構えていたその時、田田がにわかに立ち上がったのだ。500kg近い母体の体重移動を感じ、引きずられたその瞬間、赤ちゃんが狭い産道を抜け出た。羊水とともに胎児は一気に娩出された。初めての赤ちゃんはこうして生まれた。

無事の誕生に興奮した我々は、子を心配し近づく母を邪魔とばかり室外に追い出し、皆でぬれた毛を拭き、ドライヤーまで持ち出す有り様だった。母ラクダが子に最初にすべき大事なタッチングを我々は奪っていた。後に気づくのだが子にとっては実に余計な手出しだった。

毛も乾き、元気に首を上げた頃に気づいたのは、部屋の外で「ウゥ、ウゥー」と心配そうに鳴く母の声だった。田田にも無用な心配をかけていたのだ。母子が離されていた時間はほんの30分程だった。産室に戻された田田はすぐに子に近づき、やさしく舐め、愛情を注ぎ、前脚で子をやさしく刺激し、「立って」と勇気づけた。元気をもらった子はよろけながらも立ち上がり、母に寄り支えを求めた。母はただどっしりと子を受け止めるだけだった。初めての母子の触れ合いは、これから展開される自然が編み出した絶妙な仕掛けのプロローグだった。

子が母を求めると田田の乳房からお乳が滴り落ちて来たのだ。自然が母子に与えた神秘的で絶妙な命をつなぎ、育むための仕掛けだ。子は甘

い匂いに引き寄せられ、お乳を飲み始めたのだ。お乳を与える母の姿は満足そうだった。母と子の絆はこうして結ばれてゆくのだらうと思った。

母に守られ、たっぷりのお乳をもらい子はすくすくと成長した。市民はこの雌の子に「鈴鈴(りんりん)」という美名を与えてくれた。

順調に育った鈴鈴、数年後には立派な雌ラクダに成長し、年頃になり今度は自身がお母さんになったのだ。だが、ここで思いもよらぬ出来事が待ち受けていた。

鈴鈴は初産ながら赤ちゃんを無事に出産、我が子に優しく接するなど、いいお母さんぶりを見せた。ところが、赤ちゃんが立ち、お乳を飲もうとした時、異常な動きを見せたのだった。子がお乳を飲もうと鈴鈴のからだをまさぐり、お腹の下に入ろうとするたび、鈴鈴は子を自分の目の前に置くために体位を変えるのだった。子が見えなくなることで、何かを感じたのだろうか。介添え哺乳を試みても行動は変わらず、その子は人の手で育てられた。

スムーズに出産ができた鈴鈴が、どんな心理で、なぜこうした行動を取ったのかよくわからないが、彼女の生い立ちに何か隠れているようでもあった。

彼女自身、出産直後に母から受けるべき愛あるタッチング体験が欠落していて、瞬間的だが心に言いようのない不安を体験したのは間違いない。そんな体験が異常とも言える母の態度になっていたのかもしれない。刷り込み現象は動物種で大きく異なるが、群生活のラクダでは母子の絆づくりは生まれた瞬間であり、それに対応するため新生児の感覚も研ぎ澄まされて生まれて来るに違いない。

だとすれば、鈴鈴の誕生時に私たちがしてしまった「余計な手出し」は、どっしりとした母性を育むための大事なワンピースを奪っていたのかもしれない。母子を結ぶ巧妙な仕掛けは、自然な流れの中にあるのだらう。